

## 遠藤周作論 : 長崎・キリシタン資料の受容を中心に

下野, 孝文

<https://hdl.handle.net/2324/4772320>

---

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (学術), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 下野孝文

論文名 : 遠藤周作論—長崎・キリシタン資料の受容を中心に—

区 分 : 乙

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、長崎を舞台とした作品を主に資料などの受容状況を検討し、構成、造型、描写等への具体的な反映について論証したものである。

まず序では、関連する創作を俯瞰する目的から、留学を経て小説を書き出し、初期作品から切支丹物へ、さらにその後の展開について段階的に整理した。

第一章は、〈浦上四番崩れ〉を題材にした最初の切支丹物「最後の殉教者」と、最後となる『女の一生』一部とを対象とした。第一節では、「最後の殉教者」について、『沈黙』への基点としての位置、その意味を説いた上で、典拠となった永井隆『乙女峠』、また補助的に援用した助野健太郎『キリシタンの信仰生活』との描写の比較から撰取の度合いと独自性を考察した。続く第二節では、〈浦上四番崩れ〉が外交問題へと派生していく展開に着目し、「最後の殉教者」『女の一生』一部における史実の取捨と創意とを、その経過に沿って『日本外交文書』等により跡付け詳述した。

第二章は、遠藤自身『沈黙』の前奏曲と捉える『哀歌』所収の「雲仙」、「札の辻」、加えてこの『哀歌』から象徴的な意味をもって登場する〈踏絵〉を主題とした。第一節「札の辻」では、依拠した資料と、また永井荷風「深川の唄」の情緒を借りた「生活」から「人生」へという試みとについて、前者はフーベルト・チスリク「江戸の大殉教」(『キリシタン研究』第四輯)との関係を重点的に、後者はその内容と類似する設定、描写の多い『満潮の時刻』を手掛かりに論じた。第二節「雲仙」に関しては、私小説風に装うことの効果をふまえ、姉崎正治『切支丹迫害史中の人物事蹟』所収「キリシタンの懺悔告白」、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』などからの影響を精査した。そして第三節では、『哀歌』以降重要になる〈踏絵〉を中心に検討した。初めての長崎訪問で見た踏絵に付いた足指の痕が『沈黙』執筆の動機となったとは遠藤の言だが、それ以前に岡田章雄「踏絵について」(『キリシタン研究』第二輯)からの様々な示唆のあったことを立証した。

第三章は、『沈黙』を多様な観点から考察した。第一節では、作品を構成する要素について、長與善郎『青銅の基督』、『長崎オランダ商館の日記』をはじめとする諸資料との関係を概括的に整理した。さらに第二節では作品に沿って、クリストヴァン・フェレイラ神父が棄教し沢野忠庵となったその後について、古賀十二郎の研究を軸に『長崎港草』『長崎実録大成』等の諸資料を参考に検討した。そして同様の方法から第三節では、捕縛後江戸小日向の〈切支丹屋敷〉で四〇年余りを過ごすことになるロドリゴのモデル、ジュゼッペ・キャラ神父について『日本切支丹宗門史』、『査祓余録』等の資料により跡付けその造型を中心に論じた。続いて第四節では、長與善郎『切支丹屋敷』精読から得た要素の『沈黙』への取り込みと、『契利斯督記』を含め関連する資料をもとに井上筑後守政重の後継へも及んだ影響力とを分析した。また第五節では、遠藤の「『神々の微笑』の意味」を切り口に、その論理を芥川龍之介の作品、中村元の研究等から補い、それを前提に今までとは「違った形」の信仰へと動くロドリゴの思考の変遷、彼の井上筑後守へ向けた主張などの意味について詳説

した。

第四章は『沈黙』後の「母なるもの」、その周辺作品について検討した。第一節「母なるもの」は、資料、取材から得た要素の取り込み具合を確認、さらに現在のカクレキリシタンの習俗、仕来り等との比較を通してその相違と独自性を整理した。また「私」が重ねる彼等の精神性をもとに、遠藤が描く〈母なるもの〉について論述した。第二節では、「母なるもの」周辺作品へ向かい際立ってくる私的な事柄の作品への反映状況を手掛かりに、父母像、とくに父親の表現が変移する経過を追いその意味を考察した。そして第三節では、前節において指摘した父像が後退し母像が前景となっていく展開をふまえ、『哀歌』「母なるもの」を経て『死海のほとり』へと向かうなか、(一)弱者の系譜の深化(二)許しの系譜の構成(三)私的要素の素材化と分類できる顕著な傾向が現れ、さらにそれらが関連し特徴的な造型を創出していく、換言すれば〈母なるもの〉の形成されていく過程となっていることを論証した。

第五章は、『女の一生』一部を三節に分け、それぞれの観点から参考とした資料との関係を精査した。第一節では、まず、信仰の背景となった実際の浦上農民の経済状況を戸谷敏之『切支丹農民の経済生活』に見た後、作品の舞台創り、長崎の風物等については片岡弥吉『浦上四番崩れ』、本山桂川『長崎風物誌』などに関連のあることを確認した。第二節では、冒頭プチジャン神父の来航の様子、そして信徒達の〈浦上四番崩れ〉から津和野への配流という動きを、前者はピエル・ロチ『お菊さん』をはじめとした資料、後者は浦川和二郎『浦上切支丹史』等の文献との関係から整理した。そして第三節では、浦上村民の配流から帰村を『浦上切支丹史』、沖本常吉『乙女峠とキリシタン』、池田敏雄『キリシタンの精鋭』等と、また岩倉使節団の活動場面を久米邦武に関する『久米博士九十年回顧録』『特命全権大使米欧回覧実記』などと対照させ作品への影響を裏付けた。

第六章は、第五章と同様の姿勢から、『女の一生』二部を検討した。第一節では、小崎登明氏が自著『長崎のコルベ神父』のために作成した「長崎聖母の騎士資料集」第一、二巻の利用状況を主に、遠藤がそれを手にできた経緯から、描写、作中人物への反映など如何に「資料集」が不可欠な存在であったかを考察した。第二節では、強制収容所でのコルベ神父の最期までをどのような資料に依り描いたか、フランクル『夜と霧』をはじめ、マリア・ヴィノフスカ『聖母の熱愛者』、ロベール・メルル『死はわが職業』、ルドルフ・ヘス『アウシュヴィッツ収容所』等との関連から詳述した。第三節では、修平の最期と、原爆投下を描く際拠り所とした、前者は阿川弘之『雲の墓標』、後者は『長崎原爆戦災誌』、ジョセフ・L・マークス『長く険しい道』、フランク・W・チンノック『ナガサキ』等から得た要素との関係を中心に検討した。

第七章は、論じてきた作品と深く関わるトマス・アキナス、アウグスティヌスそれぞれの受容について考察した。第一節では、長期入院後、『哀歌』から『死海のほとり』等へ向かう軌跡の背景にあった、西欧基督教の核であるトマス神学に対する日本人としての違和感と、もし日本における基督教がアウグスティヌスの神学をもとに発展していたらという思いとを基点に両者の特徴とそれへの遠藤の言及を整理した。第二節では、第一節で見た概括的な分析をふまえ、それぞれの思想がどのように把握され『死海のほとり』へと向かう作品に関連していったのかについて、描写等を対照させながらその影響を検証した。第三節では、第一、二節を補う観点から別資料を活用し改めて二人の思想との関係について論及した。

そして終章では、論旨を補う観点から全体を整理し、論文の成果を提示した。

以上、本論文は遠藤周作の長崎を舞台とした作品を主に、参考資料の受容状況について考察し、実証的にその関係を明らかにした。